

井上奉生先生追悼集

松本, 倫明 / 長峰, 登記夫 / 根崎, 光男 / 渡邊, 誠 / 梶,
裕史 / 佐藤, 典人 / 漆原, 和子 / 加藤, 美雄 / 日原, 傳 /
永野, 秀雄 / 宮川, 路子 / 藤倉, 良 / 高田, 雅之 / 小林,
信彦 / 片平, 敦 / 越智, 裕一 / 石川, 絢子 / 松尾, 啓子 /
元村, 麻美 / 山本, 菜摘 / 吉岡, 耀子 / Matsumoto,
Tomoaki / Nagamine, Tokio / Nesaki, Mitsuo / Watanabe,
Makoto / Kaji, Hiroshi / Sato, Norihito / Urushibara,
Kazuko / Kato, Yoshio / Hihara, Tsutae / Nagano, Hideo /
Miyakawa, Michiko / Fujikura, Ryo / Takada, Masayuki /
Kobayashi, Nobuhiko / Katahira, Atsushi / Ochi, Yuichi /
Ishikawa, Junko / Matsuo, Keiko / Motomura, Asami /
Yamamoto, Natsumi / Yoshioka, Yoko

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / The Hosei Journal of Sustainability Studies

(巻 / Volume)

24

(号 / Number)

2

(開始ページ / Start Page)

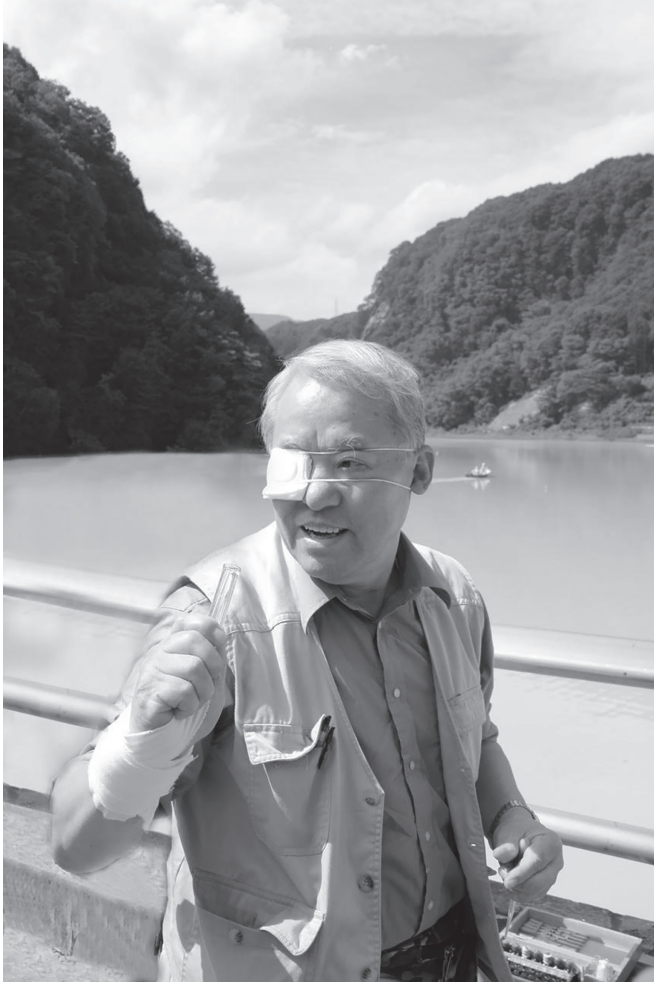
1

(終了ページ / End Page)

75

(発行年 / Year)

2024-01-31



井上先生 FS にて

井上奉生先生追悼集の発刊に寄せて

法政大学人間環境学部長 松本 倫明

この度は井上奉生先生の追悼特集号を出版できたことを大変うれしく思います。井上先生は1966年に法政大学文学部地理学科をご卒業後、(財)資源科学研究所(1971年国立科学博物館と合併)に助手として勤務しながら、1969年に法政大学大学院人文科学研究科地理学専攻修士課程を修了されました。1987年に法政大学第二教養部に助教として着任され、1991年に教授に昇格し、1995年にスウェーデン国立農業大学環境分析研究所へ留学された後、1997年に法政大学第二教養部の学部長に就任されました。1999年からは法政大学人間環境学部に異動し、2013年に定年退職されました。井上先生は陸水学をご専門とし、日本やスウェーデンにおける陸水環境に関するいくつかの重要な論文を執筆されています。

井上先生が第二教養部学部長を務めていた時期は、人間環境学部の設置準備の最終段階でした。私が法政大学に着任したのもその頃でした。井上先生は第二教養部の教員をまとめ、新しい学部である人間環境学部へ皆が円滑に移れるよう尽力されていました。個性豊かな教員たちを統率したのも、井上先生の強いリーダーシップによるところが大きいでしょう。人間環境学部に異動した後も、何か相談事があるときは井上先生を説得することになっていました。

人間環境学部が立ち上がった後は、井上先生は新しい学部を発展させることに尽力されました。特に人間環境学部の特徴的な科目であるフィールドスタディの推進に力を注いでおられました。フィールドスタディは、学外の現地(フィールド)を訪問し、座学だけでは得られない知識や経験を五感を通して学ぶ、人間環境学部の特色ある科目です。井上先生は森吉山(秋田県)、富士五湖(山梨県)、白糸の滝(静岡県)、草津温泉(群馬県)を中心に、数多くのフィールドに学生を引率し、フィールドスタディの模範を私たち教員に示してくれました。現在に

至るフィールドスタディの継続は、井上先生のご尽力によるものです。井上先生のフィールドを大切にす姿勢は、現在の人間環境学部にも引き継がれています。

この追悼特集号では、井上先生が教育者として繰り広げた情熱と献身を讃えるとともに、影響を受けた教員や学生から寄せられた数多くのエッセイが掲載され、そのご遺徳が偲ばれます。

最後に、本特集号にご協力いただいた執筆者の皆様、編集者の皆様に心から感謝申し上げます。井上先生の教育への情熱や人間性を振り返り、その影響力を再確認することができる本特集号が、多くの研究者や教育者にとって貴重な資料となることを願っています。

故・井上奉生先生に対する敬意と感謝の念を込めて。

井上奉生名誉教授略歴

作成 編集委員

- 1942年 満州国出生
- 1966年 法政大学文学部地理学科卒業
- 1966年 (財団法人) 資源研究所助手
- 1969年 法政大学人文科学研究科地理学専攻博士課程了
- 1987年 法政大学第二教養部助教授
- 1991年 法政大学第二教養部教授
- 1995年 スウェーデン国立農業大学環境分析研究所留学
- 1997年4月～1999年3月 法政大学第二教養部部長
- 1999年 法政大学人間環境学部教授
- 2013年3月 法政大学人間環境学部定年退職
- 2014年 法政大学人間環境学部名誉教授

法政大学地理学会における活動

- 1982～1984年度 庶務委員長
- 1986～1987年度 集会委員長
- 1988～1989年度 会計委員長
- 1990～1991年度 副常任委員長
- 2005～2006年度 広報委員長
- 2009～2014年度 副会長

著書・論文

著書

1983年

地理調査法（自然編）法政大学通信教育部（東郷正美・井上奉生・佐藤典人）

資源科学研究所彙報

1966年 67号

利根川水系（とくに吾妻川水系）における水質の変貌について（予報）（三井嘉都夫・井上奉生）

1967年 68号

米代川の塩水溯上について（井上奉生）

1968年 70号

中川流域における土地開発と水質の変化（井上奉生）

1970年 74号

田名部川の水利に関する研究（井上奉生）

1970年 74号

渡島半島・大沼流域における塩素量収支に関する研究（井上奉生）

1971年 75号

東北地方北部における雨水中の塩素イオン濃度分布と地形との関係について（井上奉生）

1971年 75号

上北－三本木－八戸地域の洪積台地の火山灰土壌の調査と分類——土壌層位学の土壌分類への適用例——（井上奉生）

環境科学の諸断面（株）土木工学社 三井教授還暦記念論文集

1982年

山間地域における空中塩分の降下とその河川水質に与える影響（井上奉生）

水利科学

1986年 169号

河川の水質汚濁化とし尿処理排水(2)(三井嘉都夫・井上奉生・桑原正美・佐藤典人)

法政大学多摩研究報告

1986年 第1巻

近江盆地周辺地域における風送塩の降下特性について(井上奉生)

1992年 第7巻

諏訪湖の“釜穴”に関する資料(井上奉生)

2001年 第16巻

フェノスカンジヤ楕状地に発達する完新世の低断層崖(井上奉生)

法政地理

第18号 1990年3月 研究ノート

日本海側の山間流域における積雪中の溶存成分について(井上奉生・桑原正見)

第19号 1991年3月 資料

山地溪流におけるトレーサー実験(井上奉生・小寺浩二)

第26号 1997年9月 論説

山間地域の人造湖における水温特性および濁度からみた密度流について(井上奉生)

第46号 2014年3月

人間と水(井上奉生) 2013年度法政大学地理学会学術大会・記念講演

水文・水資源学会誌

1994年 7号

多摩川における河川敷利用の変遷について(三井嘉都夫・井上奉生・小寺浩二)

法政大学教養部『紀要』自然科学編

1984年 第48号

房総半島における風送塩の降下特性について（井上奉生）

1989年 第68号

河川源流部の水質と空中塩分との関係（井上奉生）

1990年 第72号

北上川流域における空中塩分の降下特性（井上奉生）

1993年 第84号

空中塩分の標高別降下特性（井上奉生）

人間環境論集（法政大学人間環境学会）

2000年 第1巻

スウェーデンにおける陸水環境（井上奉生）

Japanese Progress in Climatology

1987年

River Water Pollution and Treated Waste Water in Saitama Prefecture, the Kanto District, Japan（井上奉生）

1989年

On the study of variation of river-bed and its influences on drainage area.（井上奉生）

報告書

1969年 日本原子力発電(株) (財)資源科学研究所

東海発電所放水口周辺海水温調査報告書（井上奉生）

1972年 運輸省第一港湾建設局

秋田湾大規模工業港計画調査報告書（井上奉生）

1974年 建設省東北地方建設局

秋田湾地域自然環境保全計画調査報告書（井上奉生）

- 1975年 建設省東北地方建設局
阿仁川ダム環境影響調査報告書（井上奉生）
- 1976年 建設省東北地方建設局
阿仁川ダム環境影響調査報告書（井上奉生）
- 1983年 農林省東北農政局
下北地域表層地質調査報告書（井上奉生）

講演・巡検

- 1985年11月23日（土）～24日（日） 第4回例会
巡検「諏訪盆地～甲府盆地」案内
- 1989年12月16日（土） 第3回例会 講演
- 2013年4月27日（土） 定期総会記念講演 「人間と水」

第二教養部から人間環境学部へ・ 改組転換経緯年表

作成者：根崎 光男（人間環境学部教授）

- 1993年4月 第二教養部長に村上恭一が就任する
- 7月 「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会（川上忠雄常務理事の私的諮問機関）が発足し、第1回検討会開催。「市ヶ谷再開発プロジェクトチーム」「カリキュラム改革プロジェクトチーム（準備会）」（いずれも井坂義雄常務理事の私的諮問機関）が発足する
- 1994年2月 「21世紀の法政大学」中間報告書が作成される。このなかで、「教養部の発展的再編を含む改革」「環境問題に取り組む人材養成に向けた教育研究の改革」の必要性が確認された
- 5月 「21世紀の法政大学」審議会（会長・高木利夫）が発足する
- 1995年3月 阿利莫二総長、健康上の理由により辞任する
- 4月 第二教養部長に安藤俊次が就任する
- 5月 総長に下森定が就任する
- 6月 「21世紀の法政大学」審議会第2作業部会から「新学部の設置と昼夜開講制の導入」についての答申が出される。
- 7月 特別シンポジウム「大学を考える」第1回が開催される
- 10月 二教教授会内に「教学改革検討委員会」が設置される
「どのような新学部が望ましいか」について、いくつかのシミュレーションが行われる
- 特別シンポジウム「大学を考える」第2回「あなたにとって学生とは？」開催される
- 11月 特別シンポジウム「大学を考える」第3回「20世紀からの発信…『21世紀の法政大学』」開催される

- 下森総長より教学改革本部設置の提案が出される。二教は条件付で承認する
- 12月 特別シンポジウム「大学を考える」第4回「大学教育と市ヶ谷再開発」開催される
- 1996年1月 教学改革本部発足、第二教養部から安藤部長、松田知彬主任、高木利夫が本部委員となる
- 2月 本部会議の下に教学改革企画委員会と作業プロジェクトチームを設置する。教学改革企画委員に井上奉生、「二教の改組・転換による生涯学習を内容とする新学部の設置、および昼夜開講制の導入」作業プロジェクトチーム・Aチームに渡邊誠・永野秀雄が参加。Aチーム議長・渡邊、Bチームに関口和男、Cチームに日原傳が参加する
- 教授会内の「検討委員会」では新学部名称として「人間環境学部」（仮称）が望ましいとの意見でまとまる
- 6月 総長に清成忠男が就任する
- 「21世紀の法政大学」審議会解散。川上忠雄学務理事（教学改革担当）から新学部認可と経済・社会学部二部の昼夜開講制申請を同時にやることは困難との連絡あり。しかし、二教の「教学改革検討委員会」は「人間環境学部」（仮称）の原案作成作業を続ける
- 7月 市ヶ谷再開発本部が発足する
- 9月 「二教の改組・転換による生涯学習を内容とする新学部の設置、および昼夜開講制の導入」作業プロジェクトチーム・Aチーム（座長・渡邊誠）が「人間環境学部」（仮称）の骨格案をまとめる。この学科のなかに、「いのちと環境コース」「くらしと環境コース」「しごとと環境コース」「まなびと環境コース」の4つのコースを設置することが示される
- 11月 教学改革企画委員会から人間環境学部（仮称）にかかわって「新学部の設置、昼夜開講制、学生定員の抛出、構成員の配置、

教養教育のあり方と組織」を内容とする報告書が提出される。
この報告書が、教学改革本部会議、学部長会議で承認される。
11月27日の二教教授会でも承認される

- 12月 「人間環境学部」(仮称)設置準備委員会発足、委員長に経営学部の堀内行蔵、二教の田中勉、池田俊彦、渡邊誠が準備委員となる
- 1997年3月 「市ヶ谷地区教養教育協議会準備会」発足、協議会規程案作成作業開始。二教からの委員として関口和男・遠藤茂雄、人間環境学部設置準備委員会からの委員として池田俊彦が就任する
- 4月 第二教養部長に井上奉生が就任する
- 6月 特別シンポジウム「大学を考える」第6回が開催される
- 9月 大学は文部省に「人間環境学部」の設置認可を申請する。このなかで、人間環境学部は地球環境問題の深刻化に対応して、環境問題についての社会科学系の学際的教育を行う学部であり、市ヶ谷キャンパスに設置し、昼夜開講制・ Semester制をとり、社会人の生涯教育を重視、土曜・日曜開講制を実施することを盛り込む。学生定員は、昼間主コース50名、夜間主コース200名であった。その際、各学部から定員拠出を受ける
- 1998年1月 人間環境学部に対する大学設置審議会のヒアリングが行われる
- 2月 文部省より第一次審査の結果、審査継続(第一次審査合格)が通知される
- 3月 市ヶ谷新棟名称、公募により「ボアソナード・タワー」に決定される
- 5月 人間環境学部設置準備委員会が開催される
人間環境学部教授会準備会(第1回)(委員長・堀内行蔵)が開催される。このなかで、学部設立記念国際シンポジウム・出版物・広報活動・付属校生への学部説明会などについて意見を交わす
- 6月 特別シンポジウム「大学を考える」第7回「二部が変わる」が

- 開催される 人間環境学部設置準備委員会が教員審査の書類づくりに取り組み、文部省に第二次審査（教員審査）の書類を提出する
- 9月 文部省より第二次審査（個人資格審査）の結果が通知される
- 11月 人間環境学部創設記念「日中地球環境保護シンポジウム・東アジアの地球環境を考える ― 日本・中国を中心に ―」（主催・法政大学）開催。中央大学教授宇沢弘文、上海市政府環境保護局弁公室主任邱在国の講演およびパネルディスカッションが行われる
- 12月 文部省より人間環境学部の学部設置が正式に認可される
- 1999年3月 2000年度より学部昼間主コース定員を100名とすることが認可される
- 4月 人間環境学部人間環境学科が正式にスタートする。堀内行蔵が初代学部長就任（発足時教授会構成員27名）。人間環境学部新1年生（300余名）を迎える
- 6月 総合大学ではじめてISO14001を取得する
- 8月 夏季休業中にはじめてフィールドスタディ13コースが実施される
- 2000年3月 ボアソナード・タワーが竣工する
教学改革本部が解散する
- 2002年4月 人間環境学部長に田中勉が就任する
- 2003年3月 人間環境学部第1回卒業式が挙行される
- 4月 大学院社会科学研究所環境マネジメント専攻が設置される

〈参考文献〉

『21世紀の法政大学・中間報告書』（『21世紀の法政大学』プロジェクト検討会、1994年2月21日）、『法政大学新学部（仮称・人間環境学部）骨格案』（1996年9月26日）、『人間環境学部教授会準備会（第1回）資料』（人間環境学部設置準備委員会、1998年5月14日）、『法政大学と戦後五〇年』（法政大学、2004年）など。

追悼 井上奉生先生

渡邊 誠（人間環境学部教授）

先生のご貢献をたたえて

法政大学名誉教授の井上奉生先生が逝去されました。ここに謹んで先生のご冥福をお祈りいたします。

先生は1987年に法政大学第二教養部に就任され、1997年には同教養部長になりました。先生は当時学内で進められていました教学改革、特に人間環境学部の創設にご尽力されるなど、法政大学発展のために貢献されました。また1999年に同学部が設置されるのと同時に学部専任教員となられ、同学部の中心を担う教員として永年活躍されました。ここに先生のご貢献に対しまして心より感謝を申し上げ、敬意の念を捧げたく存じます。

現在の法政大学は市ヶ谷、多摩、小金井キャンパスにおいて15学部を擁する総合大学となっています。1999年に人間環境学部、国際文化学部が誕生する以前には、本学は6学部、2教養部から構成されていた大学でした。1990年代には教養部の改組転換を伴う形で学内の教学改革が実現しましたが、現在の法政大学はこの時代の改革の成果であったといえます。先生はこの改革に対し多大なご功績を残されております。この時期に経験しました本学の教学改革の歴史を記すことにより、先生のご貢献をたたえたいと存じます。

人間環境学部創立の経緯

1. 教学改革の背景について

本学における1990年代の教学改革は、大学を取り巻く様々な社会状況の変化に対応したものであったといえる。当時例えば、18歳人口の減少、二部（夜間部）の役割の変化、大学設置基準の大綱化、生涯学習への期待拡大などの問題が議論されていた。このような社会情勢に対応するため、この年代において新学部

の設置を伴う新しい大学改革構想の検討が開始されたのである。

新学部を構想するためにはそれまでの大学における教学的構造、例えば学部・学科構成、学部等の学生定員、教養教育体制などの変更にかかわる比較的全学的規模での改革が必要であった。また新学部の専門領域や担当教員などの構成、教室等の環境整備などについて様々な要件を考慮する必要もあった。このためには当時の既存学部、教養部などが協力し連携を図ることが求められていたが、その前提となっていたのは学内教職員をはじめとする関係者間の信頼関係の構築であった。

発展的解消を伴う形で新学部への移行が想定されていた第二教養部（二教）においては、新学部のカリキュラム構想、移籍教員の選任、二部教養課程に対する移行期（新学部設置後4年間）対策などが検討課題となっていた。また第一教養部（一教）を含めての課題としては、新学部設置後の教養教育のあり方と教養部に代わる新組織の設置およびその運営方法の確立などがあった。また既存学部との関係においては、学部から新学部へ抛出する学生定員の調整などが必要であった。もちろん大学経営層との調整を前提としていた。このように多くの組織に関連する調整を進行させながらより現実的な方策を模索することができたのは、当時築かれた学内における協力関係によるものであったことを強調したい。井上先生のご貢献はこの点を含めて多大であったといえるであろう。

2. 新学部創設までの経緯について

本追悼集の中で『第二教養部から人間環境学部へ・改組転換経緯年表』（根崎光男）が掲載されている。これにより1990年代における本学の教学改革と新学部としての人間環境学部設置までの経緯が理解される。ここでは主にこの年表の中から教学改革の経緯として特に重要と思われる事項および井上先生のご貢献の様子が理解されるであろう事項を中心に解説を加える。なお参考文献として挙げた『法政大学と戦後五〇年』の中の814—822頁に遠藤茂雄が当時の教学改革の歴史的経緯を詳しく記載している。本稿でも多くのところでこれを参考にした。年表と併せて参照願いたい。

1987年4月

井上奉生先生が第二教養部教員として就任される。社会分野の科目である地理学担当としての着任であった。(著者は1990年4月に二教教員として入職したが、この年に先生は執行部(副主任)を担当されていた。)

1993年7月

「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会が設置された。これは当時の常務理事・川上忠雄の諮問機関として設置されたものであった。翌年2月にこの検討会から中間報告書が提出された。これは法政大学の長期的なビジョンなどについての検討結果を報告したものである。

1994年6月

上記プロジェクト検討会の検討結果に関連して「21世紀の法政大学」審議会が設置された。翌年6月にはこの中の第二作業部会からの答申として「新学部の設置と昼夜開講制の導入」に関する報告が提出された。

1995年10月

二教教授会の中に「教学改革検討委員会」が組織された。これは上記の答申内容を受けてつくられたものであった。これにより、二教が新学部へ移行することを考えるのに際して、その新学部の内容について検討が始められることになったのである。井上先生もこの検討委員会の委員となった。

1996年1月

学内に教学改革を推進するための「教学改革本部」が設置された。同年2月にはこの中に「教学改革企画委員会」が設置された。またこれと併せて複数のプロジェクト・チームが設置されたのである。特に二教が中心となる新学部構想(後に人間環境学部の創設に関連)の検討は「プロジェクト・Aチーム」が担当した。これは「二部の改組・転換による生涯学習を内容とする新学部の設置、および昼夜開講制の導入」について具体的な検討を行うチームであった。

上記の教学改革企画委員会は教学改革を実現するための中心的な役割を担っており、改革案、実施案などを作成するなど、新学部構想のみならずその実現へ向けての全学的な調整を検討する委員会であったといえる。この委員会へ二教からの選出として井上先生が就任したのである。

1996年9月

二教で検討してきた新学部案がAチームの会議に諮られ、「人間環境学部」(仮称)の骨格案が作成された。これにより二教を主体とした新学部構想がより具体的に進行することになったのである。

1996年11月

教学改革企画委員会が「新学部の設置、昼夜開講制、学生定員の抛出、構成員の配置、教養教育のあり方と組織」に関する報告書を提出した。この報告書には、「人間環境学部」(仮称)に関しての設置提案が含まれていた。また、新学部の完成年度末における一・二教教員の学内移籍に関する提案、新学部開設時において教養教育実施にあたる「市ヶ谷教養教育運営協議会」(仮称)の設置提案なども含まれていた。これらの内容は後に教学改革本部会議および学部長会議などでも承認されることになったのである。

1996年12月

人間環境学部についての設置準備委員会が設置された。委員長には堀内行蔵が就任した。これにともないカリキュラム構成、開講方式などについてさらに検討が進められた。翌年3月には、「市ヶ谷地区教養教育協議会準備会」が設置された。

1997年4月

井上奉生先生が第二教養部長に就任した。

1997年9月

人間環境学部の設置認可に関する申請が文部省に提出された。人間環境学部は

地球環境問題についての学際的教育をめざしており、生涯学習を実践するため昼夜開講制、土曜・日曜開講制などを導入することに特徴があった。学生定員は250名（昼間主コース50名、夜間主コース200名）であったが、これは法、文、経営、経済、社会の各学部（当時の既存文系全学部）からの定員拠出によるものであった。

1998年9月

二教教授会内に「移行期対策委員会」が設置され、新学部設置以降4年間（移行期）における二教教授会の運営などに関する提案を行った。これは人間環境学部へ移籍する教員との協力関係についての申し合わせに関するものであった。この移行期対策委員会は井上先生が主導していたものであった。移行期には二教教授会の構成員数が減少することになるが、井上先生は新学部設置によって二教教授会の運営に支障が出ないように配慮することに傾注していたのである。このような移行期対応については井上先生のお人柄が特によく現れているところであろう。本学が経験した教学改革の歴史の中でも特記されるべきことのように思えない。

1998年12月

人間環境学部の設置が文部省より認可を受けた。これにより1999年4月からの開講が可能になったのである。翌年3月、設置2年目の2000年度から学生定員数として昼間主コースに新たに50名が加えられることになった。これは法、経営学部の追加による学生定員拠出を受けてのものであった。

1999年4月

人間環境学部が開学した。第二教養部は2003年3月に幕を閉じたのである。

3. 人間環境学部（案）の構想過程について

1996年9月に二教を中心として作成された「人間環境学部」（仮称）の骨格案は、現代に生きる人間の視点から社会に内在する諸課題について教育・研究する

というものであった。より多くの人が学ぶことのできる生涯学習の場を提供することも併せて重視していた。この案では人間と環境との関係性について、根崎による年表にも示されている4つのコースの視点からアプローチするというものであった。それらのコース名称を著者による概略説明と併せて示すと次の通りである。

- ・「いのちと環境コース」人間の生命について、哲学、倫理学、生命科学、その他の領域から分野横断的に考え、社会的諸制度および諸活動などに関する現代的課題について考察する。
- ・「くらしと環境コース」人間の暮らしの舞台である地域、都市さらには地球における環境問題について、国際協力、自然保護の観点を含めて考察する。
- ・「しごとと環境コース」人間の生活を支える仕事と情報技術を含めたテクノロジーとの関わりについて、経営、労働、法律などの観点から考察する。
- ・「まなびと環境コース」人間の知的営みとしての学びに関連して、社会生活や文化的活動の充実などをめざすための多様な現代的学習のあり方について考察する。

新学部の設置準備委員会委員長の堀内行蔵は、上記の4コースからなる内容から地球環境問題の教育・研究を中心に据えた新学部案へと修正し文部省への設置申請へと繋げたのである。この新学部案では環境問題に対する人間の意識と新たな価値観を養成する「人間形成」が重視されていた。これにより二教がもっていた幅広い学問領域は学際的環境教育へと進化したのである。これと同時に学びの方法を発展させて、昼夜開講制および土曜・日曜開講制などの開講方式が実践されるようになったのである。なお、参考文献『法政大学と戦後五〇年』の中の822-824頁に根崎光男が人間環境学部発足当時の状況を詳しく記載している。それも併せて参照されたい。

当初、二教の教学改革検討委員会で議論された上記の4コースの内容は、社会的政策へ向けての考察をめざしたものであったといえる。この考え方は1999年に新学部として設立された人間環境学部の基礎になっており、その後人間環境学部はカリキュラム改革などを重ねながら現在に至っている。新学部が創設された当時の人間環境学部の英文による学部名称は「Faculty of Humanity

and Environment」であったが、2017年にこれが改名され現在では「Faculty of Sustainability Studies」となっている。今日では地球環境問題研究を含む形で広く社会課題を考える場としてテーマ範囲が拡大しているのである。当時の二教が模索した学際的教育・研究への探求は現在もなお進化を続けているといえるであろう。

4. むすびとして

1990年代に経験した教学改革は、当時の社会的要請とともに学内教職員の協力が得られたことが推進力となって実現されたものである。これも人情味あふれる井上奉生先生の人徳のなせる業であったといえるであろう。井上先生は時折ジョークを混ぜ込みながら周囲の人々を和ませる話術をお持ちだった。また、一人ひとりに配慮する繊細さも兼ね備えておられた。井上先生と教学改革についての議論を重ねた当時の光景が思い出される。

心から哀悼の意を表します。

参考文献

『法政大学と戦後五〇年』（法政大学、2004年）、『21世紀の法政大学・中間報告書』（「21世紀の法政大学」プロジェクト検討会、1994年2月21日）、『法政大学新学部（仮称・人間環境学部）骨格案』（1996年9月26日）、『1999年の改革 法政大学』（学部開設時パンフレット）、『2000人間環境学部』および『2017人間環境学部』（学部パンフレット）など

新入生の皆さんを迎えて

井上 奉生（第二教養部長）

入学おめでとう。様々な想い、様々な目的を持って大学の門をくぐったことでしょう。

皆さんを心より歓迎し、学生生活が豊かな実りあるものとなることを願います。

さて、皆さんは大学の各専門学部に入學したわけですが、最初の二年間は主として「一般教養」を履修することになっています。「一般教養」とは、文字通り「広く共有されるべき教養」という意味です。具体的には、様々な知識や情報の集積からなっています。しかし、知識や情報の寄せ集めが、そのまま「一般教養」なのではありません。個々の知識や情報が有機的に結ばれてはじめて、「一般教養」の名に値します。そして「一般教養」は決して、「専門」と呼ばれる分野の補完物ではありません。それ自体、独立した存在なのです。

例えば、地理学の一分野に陸水学と呼ばれる学問があります。これは河川、湖沼、地下水、氷河など内陸にある水域を物理学的、化学的、生物学的な諸現象を主目的に研究する学問です。これ自体いわゆる「専門」と言ってよいでしょう。確かに陸水学を分類すれば、その対象とする事象により、河川学、湖沼学、地下水学、氷雪学、陸水生物学などに分類されます。これらを研究するには気象学、気候学、地形学、地質学、土壌学、化学、生物学などの地球物理学、地球化学の総合的基礎知識が必要です。また、応用科学としての土木工学、農業土木、森林工学、水産学などとも密接な関係にあります。

さらに大事なことは、人間に深く関わる水の災害を防ぐ治水、生活用水や各種産業に利用される利水、水質の保全や景観などの環境問題といった法学、経済学、社会学、歴史学に関わる社会経済的側面の学問も見逃すことはできません。こうしてみると陸水学は境界領域の学問の代表といってよいでしょう。一方、上で述べた陸水学以外の学問も各々「専門」なのですが、陸水学にとっては「一般教養」なのです。すなわち大学では特定の専門知識を修得する場にとどまらず、幅広い基礎学術知識やその方法論を学ぶ場でもあります。「一般教養」と「専門」

は大学教育の両輪を成しているわけです。

大学での生活が夜間であるという制約はありますが、現在のライフスタイルは24時間化という時間的多様化社会です。自分の生活リズム、すなわち「学習」「仕事」また「遊び」の時間をどこに振り分けるかをなるべく早く定め、充実した学生生活を送って下さい。



居酒屋にて夜の講義

生きものへの優しさ

梶 裕史（人間環境学部教授）

私が人間環境学部の前身である第二教養部に着任したのは1996年で、井上先生はスウェーデンの在外研究から帰国されて、新学部設立準備の中心人物として頼もしく動き始められた頃だった。翌1997年から第二教養部最後の学部長になられ、私は1998年に教授会副主任として、執行部で井上先生の薫陶を受けた。

人間環境学部設立の経緯については、別稿に譲り、先生の人間性にかかわる思い出話を書きたい。多くの先生方やゼミOB・OGの方々が書いておられるエッセイから共通して浮かび上がって来ることと合わせて、偲んで頂ければ幸いである。

まず、学部教員で本来は先頭に立って書くべき方——最も親交が深かった関口和男先生——が、井上先生に先立つこと5年前に逝去されてしまったことが、改めて悲しい。関口先生の追悼号でも書いたが、井上学部長が教授会主任に選んだのが故・関口先生であり、お二人はそれ以来非常に親密になり、若かった私もよく居酒屋などに一緒させて頂いた。執行部のしごとでは、まだ入って3年目で新米だった自分など微力に過ぎず、執行部会議ではお二人の「戦略・戦術」を学んで、（この二人は誠実なワルだなあ笑）とひたすら感心するだけだった。

執行部会議も教授会も、特筆すべきは非常に短く済んだことで、新学部に向けた審議事項も多かったはずだが、ポイントを絞ってきばきと裁いていったことは、後年自分が学部長になった時も、その流儀を真似た。もちろん、難しい問題について説得する「人間力」は遠く及ばず、であるが、井上学部長・関口主任のもとで副主任を務めた1年間は、いわば「井上塾」のかけがえのない実習となった。

井上先生がいなかったら人間環境学部は誕生していなかっただろう、というのは他の先生方も書いている通りで、もちろん初代学部長を務めて下さった堀内行蔵先生の功績も大であるが、堀内先生と井上先生はいわば表・裏のコンビで新学

部の発足の黒柱となったのである。

無事に学部がスタートして以降、井上先生から単独で飲みにも誘われることも増えた。

私は、飲み会のつきあいは良いが下戸の部類であり、「酒が飲めない人を俺が誘うのは、梶さんだけだよ」と何度か言われたのは、意外でもあり嬉しくもあった。

夕方6時を過ぎてボアソナードタワーの研究室（23階）にいと、24階の資料室でコピーなどをしてきた井上先生が、一服しに立ち寄る。先生の研究室は13階であり、同じく喫煙者である私の部屋（当時は、禁煙ではなかった）は、一休みするのにちょうど良かった。「おい、残業か？」——それが合図だ。「いえ、もうちょっとで終わります」「きょうは帰るのか？」——それも、ちょっと一杯いこうや、という合図なので「わかりました、行きましょう」となる（笑）他の方も書いているが、先生が仕事帰りに寄るのは安く魚が食べられる庶民的な店であった。

私は人文科学系の人間だが、（趣味で）大の海好きで、子供の頃からその延長で「地理」「自然」も好きであったために、井上先生はそういう自分の性向を見抜いたのか、梶とは話が合って楽しい、と思って下さったようだ。これはたぶん、関口先生とは異なる私の資質である。関口先生と井上先生は、他の方も口を揃えて触れている通り、タイプが大きく違うからこそ互いに認め合って、水魚の交わりになったというコンビであるが、関口先生は言い換えると、徹頭徹尾「哲学」の人であり、「自然（の現場）」について、頭では理解できても肌身でわかる感性は、乏しかった（笑）。その点私は、「自然児」井上先生の系統の感性をたぶん有しており、自然についての話題で時おり、「あんたは勘がいいねえ」と褒めてもらったのも、「よいしょ」でもなかったろうと、秘かに自負している。

思い出話は尽きないが、井上先生に接した人は、教員でも学生でも誰もが、その優しいまなざしに惹き寄せられると思う。人間の外面について「表情は笑っているが目は冷たく笑っていない」などと言う場合があるが、井上先生はそんな表情と無縁である。限りなく澄んで優しい光を湛えている。

このまなごしは、おそらくあらゆる「生きもの」へ向けられた愛情であり、人間に対しても同じだったのだろう、と思っている。井上先生と差して居酒屋で刺身をつまみながら聞いた、東北における井上少年の回想譚を幾つか、箇条書き式に紹介しよう。

- ・(傷ついて母熊から残された) 子熊をひきとって、しばらく飼っていたことがある。
- ・(動物がなつく少年であることを大人にも知られており) 保健所から、狂犬を集めて渡してくれと言われたが、(可哀そうだから) いやだと断った。
- ・「よく「五感」と言われるが、自分は「第六感」というのも時々経験がある。冬に(鉄砲撃ちで) うさぎを狙う時、繁みに隠れているうさぎの存在が、目には見えないがすーっと胸に伝わってきてぞくっとする瞬間がある。そういう時、大抵うさぎがいる」

居酒屋で聞いたこの種の話のなかでも最も印象的な言葉として、「俺は、山道で熊に会ってもこわくない。蛇も、蜂もこわくない。(一人で山道を歩いていて) 何が怖いって…」とぼつりと言われたことがある。「人間に会ったときが一番こわいよ…」

完全に、動物の気持と同化している言葉であり、自然児・井上奉生の真骨頂がこめられた名言ではないかと思う。

結婚して埼玉に居を構えられてから、(娘さんが縁日で買ってこられたのか、河原で自分で発見したのか記憶が定かではないが) 小さなカメを、余っていた大きな水槽に入れて飼ったことがあるという。一般的な人間の飼い方ならば、1か月も持たない命であろうに、井上先生は何と10年間近くも飼育し、30cm以上に成長したそうである。やがて川に返したというが、このエピソードをとってみても、いかに生きものに優しく、かつ気持だけでなく実際にいのちを愛しんで接することが出来たかを、よく物語っていよう。

再び、しごと上の井上先生の思い出に戻ると、先生は「(部下の) 関口さんや

梶さんは、好きなように、これがいいと思ったことをやればいい。責任は、おれが取るから」と言って下さった。これは部下から見た上司の理想であろう。部下のアイデアが上手くいくときは良いが、失敗する時だってあるはずだ。全部部下に任せて、責任は自分がとるというのは、口でいうのは簡単でも、そう易しいことではないことは、自分が最近学部長を務めたときに痛感した。一応この点でも「井上流」を真似てみようとはしたものの、上手くいかないこともあった。井上先生のような「人間力」——大勢をとらえる動物的な勘、(他の先生も触れているが)豪放磊落にみえて繊細なバランス感覚、人の多様性を寛やかに許容する心、等々の資質——があって初めて可能なことだろう。

関連して、(大学教員になる前に)或る人から「あなたは鐘のような男だ。大きく搗けば大きく鳴り、小さく搗けば小さく鳴る」と評されたことがあるそうだ。これは、(その評者も知っていたのか)坂本竜馬が西郷隆盛の人柄を評した言葉として知られている。

西郷といえば、前述の「責任はすべておれがとるから、君ら好きなようにやっでいいよ」というのは、実は薩摩のリーダーの伝統的な流儀であり、西郷はその典型だったとよく言われる。大きな包容力が人を惹きつける「徳人」ではあるものの、一見、茫洋として為政者としてはどこが優れているのか、秀才型の人物には偉大さが分かりづらい点、そして趣味で鉄砲猟を愛した点など、井上先生は薩摩出身ではないが、西郷隆盛と人間的に通い合うところがあったように思う。二人に共通するのは、おそらく(人間も含めた)生きものへの優しさ、であろう。

最後に、ご家庭での井上先生は、大学における先生とは違っていただかもしれない、ということに触れておきたい。2022年の12月、奥様が大学に多額の寄付をして下さった御礼と、そのご芳志を学部の「国内フィールドスタディ奨励金」として活かしたい旨をお伝えするため、当時の武真学部長と、現存の教員で先生と最も親しかった者として、渡邊誠さんと梶の3人で、先生宅を訪問した。その際、奥様から、「大学での主人は、どんな感じだったのでしょうか。その片鱗がわかる動画などはないでしょうか」と言われた。

奥様のお話では、家庭では、けっこう(お子さんに対して)厳格な父であった

という。娘さんも同席されていて、直接具体的なエピソードをうかがった。

意外に思うとともに、あのように見えてシャイな面もあったので、家庭では自ら良いと信じる父親像を、外での自分とは変えて不器用に（笑）演じておられたのかもしれない。

不器用といえば、新婚旅行の話として、心中爆笑したエピソードがある。「かみさんはヨーロッパなんか好きなんだけど、俺は一緒に行ってもイタリアとかの文化遺産は興味ないわけさ（笑）新婚旅行で対馬に行ったんだけど、その時も俺、一人で調査に出かけた日があるよ」——（！）——ハネムーンで新婦を置き去りにして、一人で川の調査に出かける新郎など、どこにも居ないだろう（笑）。それを寛大に許容する奥様のお人柄も素晴らしいが、井上先生にしかできない芸当だと思う。

井上先生は、歩く時に足が速い。関口先生もせかせかと歩く方だった。お二人とも、せっかちに早々とあの世に行ってしまわれた。関口先生の追悼号（2019年3月刊）に寄せた井上先生らしい短い稿の最後が、「日時は決められないがそのうち会いに行くよ」と結ばれているのは、今思えば深く暗示的だ。

今頃、お二人は天国で毎晩のように盃を酌み交わしておられることと思う。どうか我々後輩のことを、人間環境学部の行く末を、いつまでも温かく見守って下さい。

剛毅と繊細さを兼備した井上先輩を悼む

佐藤 典人（法政大学名誉教授／前地理学科教授）

2021年12月11日、前法政大学人間環境学部教授の井上奉生先生が天に召されてしまった。享年79歳での“黄泉の国”への旅立ちは、いささか性急過ぎると惜まれる。奥様からの訃報に接し、小生はしばし茫然自失であった。井上先生はちょうど我が実兄と同じ年齢であり、その点から“井上先輩”と口にするのが馴染みやすく、肩肘張らなかつたと勝手に思い込んでいた。

井上さんと知己を得たのは、小生が法政大学文学部地理学科に学生として在籍していた頃である。その当時、井上さんは大学院修士課程を修了し、新宿の久保に在った財資源科学研究所に勤め始めた頃と記憶している。その研究所が現地調査の補助員を募っていたので、それへの小生の応募が契機となった。小生にとってアルバイトもさり乍ら、現地調査の手法を学ぶ絶好の機会であり、言うならば一石二鳥であった。今でも鮮明に憶えているのは、青森県田名部（現・むつ市）に造られた田名部川放水路での昼夜観測である。市街を水害から防衛する目的で放水路を開削したものの、潮の干満に因って海水が直線的な放水路を遡上し、田畑への灌溉揚水で塩害を招くか否かの実証的調査が眼目である。某年の夏に現地へ赴き、川舟を用いて徹夜観測を遂行した。夜の帳とぼりとともに北国の短い夏を惜しむ盆踊りの囃子が街中から耳に届く。片や我らは暗闇の田圃中で労役あるのみだった。観測を主導する井上さんの差配に従い、小生は舟上で腹這いになって身を乗り出し、放水路を往来しながら測器を流水中に上下動させて塩分濃度の時間空間的な分布を計測していた。水路の兩岸を結ぶ横断観測も不可欠だったので、河岸水際の小藪付近に近づいた時、何と蛇に遭遇したのである。蛇は日中の暑熱を避けて夕涼みを満喫？ していたと推知されるけど、幼少時から“幽霊・蛇・肉食”が小生の“三大苦手”であった。事もあろうにその蛇と出くわし、小生は驚怖のあまりバランスを崩して上半身からドボンと水路に落水した。立場を自覚した井上さんの迅速な対処のお蔭で、小生は水中で溺れもせず、かつ蛇に噛まれることもなく、即座に舟上へ引き上げられた。これが我が人生で3度目の水



小生が田沢湖で野外巡検を実施した際に潟尻にて
(前列中央がご同行頂いた井上さん。その真後ろが佐藤／1985年11月)

難の相だった。

普段、日本酒好きの井上さんはとても豪放磊落のように見受けられたけれど、
凶らずも他人様の^{いびき}鼾にからきし弱いと知り得た。それはある調査の折、井上さんが鼾に耐え切れず、旅館の部屋から寝具丸ごと廊下へ退避して眠っていたのを、翌朝早く目覚めた小生が目撃した故である。断っておくが、その鼾の発生源は小生ではない。当方は観測の疲れでいち早く寝息も立てず爆睡状態に陥り、夜中の井上さんの懊悩と避難行動を知らずに朝を迎えたのである。以来、井上さんはとても繊細な気質のお人柄だと受容して、ご厚誼を賜りつつ今日に至っていた。

井上先生、神経過敏を高じることなく安らかにお眠り下さい。合掌

井上奉生さんさようなら

漆原 和子（前法政大学教授、ブカレスト大学名誉教授）

元気印の井上さんが旅立たれたと聞いて、驚きました。私は法政大学を退職してから、岩手に住まいを移し、井上さんのうわさをお聞きすることもなく過ごしておりました。

井上さんは法政大学地理学科で一緒に学んだ、元気のいい後輩（一学年下級生）でした。共に同じ講義を受講する機会も多かったと記憶しております。その中の一つが教養科目の「地学」でした。当時有名な井尻正二先生が非常勤講師で初めておいでになった年でした。新学期の受講生は30名ほどだったのでしょうか。講義が面白いといううわさを聞き付けた隠れ受講生がどんどん増えて、後期にはなんと階段教室がいっぱいになりました。

井尻先生は夏休みを前に「全国で現地調査を伴うプロジェクトがいくつか実施されるが、だれが参加してもよいので、希望者は申し出るように。」と下さり、井上さんと私は郷里が岩手県ということもあり、青森県南部から岩手県北部に火山灰を放出した階上山の調査に参加したいと手をあげました。なんとこのプロジェクトリーダーは第四紀学の第一人者の中川久夫先生（東北大学）でした。しかも参加者は全員彼の教え子たちで、まさに専門家集団の本格的な調査でした。井尻先生は私達のためにこの中川先生に紹介状を送っておられました。大学2年生で、まだ現地調査の何たるかを知らない2人を良く受け入れてくださったものだと思います。紹介状の威力は素晴らしく、参加者全員がまるで自分たちの学生を指導するかの如く良く指導し、面倒を見てくれました。

一週間の調査期間の間、フィールドノートの書き方、火山灰の見方、露頭のスケッチの仕方に至るまで、全くの初心者をよく指導して下さったものだとおもいます。そして毎晩夕食の後はミーティングで夫々の班が観察してきたデータを持ち寄ってまとめを行い翌日の調査のルートをきめるのです。ここで本格的な調査とはこういうものなのだというのをしっかり学びました。現場ではむき出しの崖を探して降り積もった何枚もの火山灰を識別をし、一枚ずつの火山灰の厚さ

を計測して記録していきます。しかし、崖の前面は崩れ落ちた土が山のようにあり、雑草や灌木がおいしげっています。井上さんは真っ先に草を刈り、足場を切って崖をよじ登っていきます。元気印を絵にかいたような活躍ぶりでした。私はといえば、初めて履いたキャラバンシューズで足にまめが九つもできて、「明日は歩けません。」という、リーダーは「縫い針に木綿糸を通してもってこい。」という。なんと男の先生達ばかりの眼前にまめができた足を出すと、針の先をマッチで焼いてまめに針をとおしてくれるのです。なんとまめの水が木綿糸に吸われてピシャンコになってしまいます。「明日は歩けるよ!!」と励まされて、翌日も握り飯2個と沢庵二枚の昼食をもって夕暮れまで歩くのです。こんな情けない私に比べて、井上さんは嬉々として立派に現地調査の助手としての役割をはたしておられました。

この経験は、私にとってはその後の研究者としての進路にとってかけがえのないものとなりました。井上さんには聞いたことはありませんでしたが、同様に貴重な経験だったに違いありません。その後学会で中川先生にお目にかかるたびに、「元気でやってるかい？」と声をかけてくださり、心強い思いでした。

井上さんとは大学院までは一緒でしたが、その後私は海外留学、他大学への就職と、長いことおめにかかる機会はないままでした。再会できたのは50代半ばで法政大学地理学科に戻ってからです。廊下で会うと、いつも「オッ!!」と片手をあげる井上スタイルで挨拶してくださいました。退職後もいつまでも元気でられるものと思っておりました。どうぞあの世でも学生の頃のように元気で調査を続けてください。

合掌

井上先生と法政大学地理学会

加藤 美雄（法政大学地理学会 常任委員長）

法政大学地理学会（以下、学会とする）は、地理学および地理教育の研究ならびに会員相互の親睦を図ることを目的として、1949年に発足しました。その後、大学紛争期前後に活動を長期間停滞しましたが、1982年に関係者の努力により再開しました。井上先生（以下、先生とする）は再開してすぐに常任委員になられ学会の活動が軌道に乗るのに尽力されました。特に、再開してから名誉会員になるまでの32年間のうち、半分以上の17年間にわたり常任委員や副会長を務められ、学会活動に大きく貢献されました。また、役員以外にも講演や巡検の企画、更に学会誌にも多数投稿していただきました。詳細については、法政地理50号をご覧ください（法政大学図書館から閲覧できます）。

私は学会では時期が異なり一緒に活動したことはありませんが、先生の思い出として2013年度の講演と法政大学地理学会賞について述べます。

2013年度の定期総会の記念講演は先生による「人間と水」について行なわれました。講演は、生物にとって必須である水について説明した後、歴史的に人間との関わりを詳述し、専門分野である河川、湖沼、地下水などの成分を解説され、大変興味深いものでした。講演後の質疑応答では最初に私から、河川の親水と防災について質問しました。先生からは、水は人間にとって貴重な財産であり、恩恵に浴するとともに災害などの様々な問題の本質を認識し、解決するための実践活動が重要であるという、究めて的確な回答をいただいたのを記憶しています。これは、現在担当している講義における水の循環や気象災害の説明に利用させていただいています。

また、2013年度の第3回法政大学地理学会賞の選考では井上先生が審査委員長を務められ、私は審査委員として参加しました。最終選考に残った4題のうち、選考会で議論を重ねた結果、2題に絞られましたが4人の審査委員の意見は分かれました。最終的には審査委員長の井上先生が論文と発表内容まで十分に加味した決断により、私が推薦した気候学の論文が最優秀になりました。井上先生

は専門の水文学以外にも該博な知識ですべての論文を評価され、審査委員全員が納得しました。

法政大学地理学会以外では、先生と初めてお会いしたのは大学院に入学してすぐのコンパだと思います。学生と先生の顔合わせで、お互い東北出身が話題になったと記憶しています。また、先生の授業で気象庁の業務を紹介してほしいということで講義を行ないました。その時は、大勢の前で話すことには慣れていなく、更に最前列に井上先生がいらして、かなり緊張しました。他にも、先生の狩猟仲間が気象庁の私の知人でしたので、お会いしたときはよく話題になりました。



井上先生の講演の様子

(写真・法政大学地理会 2013 年度「地理学会ニュース」第 1 号より)

先生とは学問や趣味のことでまだまだお伺いしたことがたくさんありました。井上先生、本当にありがとうございました。

井上先生の思い出

日原 傳（人間環境学部教授）

私が法政大学第二教養部に専任講師として着任したのは一九九二年四月のこと。最初にあてがわれた研究室は、現在のボアソナードタワーと南門の間あたりにあった三階建ての建物の二階の一室であった。井上先生の研究室も同じ階にあったので、着任当初から親しくしていただいたことが思い出される。私が最初に入ったのは物置のような細長い部屋であったが、二三年して井上先生の隣の部屋が空いたのでそこに移った。そのあたりの研究室はももとの大きな部屋を板の仕切りを入れて小部屋にしたものと思われた。各部屋を隔てる壁に釘でも打とうものなら、隣の部屋に釘の先が飛び出たかも知れない。まさに落語の「粗忽の釘」に出てくる長屋のような世界であった。

井上先生とはよく酒席をご一緒した。最初にお会いした時に酒が飲めるかどうか尋ねられた記憶がある。第二教養部時代は水曜七限の授業の後、有志が居酒屋に集まって飲むことがいつしか慣例になった。その会は「水酔会」と名付けられた。夜の十時近くから終電を気にしながら飲むことになるのだが、そんな会が長く続いたのは、毎回出席される井上先生の魅力に負うところが大きかったのだと思っている。法政大学出身の井上先生は学内に知り合いが多く、いろいろな方を水酔会に誘って来られた。その場での出会いを通して面識を得た他学部の教員も多い。井上先生の歯に衣着せぬ物言いは学部間交渉などの難しい場面でもその効力を発揮した。第二教養部を母体とした新学部として人間環境学部が発足する際の井上先生のご活躍は誰もが認めるところであろう。

井上先生のご専門は「水」である。水質調査などで全国のあちこちに行かれています。岩魚釣りの話、鴨撃ちの話、熊に出会った時の話など、豊富な体験に基づく話題は多岐に及んだ。井上先生は秋田県の森吉に行きつけの宿があり、よく行かれていたようだ。人間環境学部のフィールド・スタディの授業も当地で行なわれたことがあったと記憶している。山登りでへばる留学生に、山頂にはコンビニがあると鼓舞した曹操めいた話、水質調査の器具をすぐに壊してしまう学生への

訓戒の話など、いろいろな学生とのやりとりを楽しげに語られる姿が思い出される。学生に慕われた先生であった。先生は二〇二一年十二月十一日にお亡くなりになった。享年七十九。お元気な姿ばかりを目にしていたので、早すぎる気がしてならない。ご冥福をお祈りするばかりである。

井上奉生先生の思い出

永野 秀雄（人間環境学部教授）

私が、井上奉生先生に最初にお会いしたのは、勤めていた企業から法政大学に転職するために、大学の会議室で行われた第二教養部「法学」担当者の採用面接に出向いたときである。

面接は、第二教養学部長を務められていた村上恭一先生が司会をされ、質疑のほぼすべてを井上先生が担当された。私が自己紹介をした後、井上先生から出た最初の質問は、「永野さん、あんたゼネコンか。いいね。俺も土木関連にいたことがあるんだ。ゼネコンなら、酒はなんでも飲めるよね。」というものであった。私は、正直に答えなければならぬと考えて、「一応、何でも飲めますが、自分からは日本酒は飲みません。」と答えたが、これが失敗であった。井上先生は、「え、そうなの。困ったなー。俺、日本酒好きなんだけど。」と渋い顔で腕組みをされている。私は日本酒で不採用になってはまずいと思い、言いたくはなかったが、「一応、日本酒も飲めますが、かつて仕事で先輩たちに勧められて1升くらい飲んで周囲の方々に迷惑をかけたので、自分からは飲まないことにしています。」と答えたところ、先生は「それならいいんだ。うちの学部は、そんなに飲まないから。」とおっしゃり、これで面接はほぼ終了となった。

この当然の成り行きではあるが、私は、井上先生が中心となって毎月第3金曜日の授業後（夜9時40分）から終電まで開催されていた学部教員の飲み会（三金会）に、必ず出席することになった。企業から来た私は、最初のうち法政大学や学部のカルチャーに馴染めなかったが、井上先生から様々なご指導を頂き、なんとか学部教員・研究者として定着することができたと思う。

井上先生が一番ご苦勞されたのは、第二教養部を解体し、人間環境学部を設立するまでの時期に、学部長を引き受けられて遂行された様々な業務ではないかと思う。第二教養部教授会が、この困難な仕事を引き受けることになる学部長を選出する投票を行い、井上先生に決定されたときに、いつも笑顔でいらっしやる先生が、厳しい表情で「よおし！」と大きな声をあげられ、顔を2度パンパンと叩

かれたのを今でも覚えている。何しろ、所属学部を解体し、新学部に移れない教員が複数出るという事態である。これらを、すべて丸く収められたのは、井上先生の人格・胆力と調整手腕の賜物であると思う。私をはじめ、人間環境学部の教員は、今後もこのことを忘れてはならない。

井上奉生先生の思い出

宮川 路子（人間環境学部教授）

1998年に私が法政大学に就職したときの、第二教養部の学部長が井上先生でした。右も左もわからなかった私を温かく見守って下さり、わからないことを伺うと、

「宮川さんねー、いいんだよ。世の中にはねー、いろんなことがあって、いろんな人がいるんだから」

と、独特の言い回しで大切なことをたくさん教えて下さいました。

あるとき、たしか6月のことだったかと思いますが、とにかく、新任教員は教授会にきちんと出ることが大切、と言われていたにも関わらず、私が開催場所を間違えて、市谷田町の校舎で行われていた教授会に大汗をかきながら遅刻したことがあります。その教授会の途中の休憩時間に

「遅刻してしまい、申し訳ございません！」

と謝った私に、井上先生は、いつものように、にこーっとお笑いになりながら、

「宮川さ～ん、だーめだよー、遅刻しちゃー。」

と、優しく声をかけて下さいました。そのお言葉に、私はどんなに救われた気持ちになったことでしょうか。

私がスウェーデンに留学する際には、井上先生がスウェーデンに留学なさったときに、アルコールが貴重なもので手に入らず、自分でアルコールを作って飲んでいて、という昔話をして下さいました。

「スウェーデンはいいところだよー、寒いけどねー」

というお話で私はほっとした気持ちになれたのをよく覚えています。

そして、あるとき、先生の研究室に伺って、個人的な心配事についてご相談したことがあります。そのときも先生は、

「いいの、いいの、そんなこと。人生にはね、いろいろあるんだから。な～んてことない。後になってみれば大したことなくなるものだから大丈夫」

と励まして下さいました。その温かい笑顔に、私は泣きそうになりました。

先生のお話はとても味わい深く、私は先生とお話するのが好きでした。入試の採点作業のために図書館で缶詰になっているときには、井上先生の傍でお弁当を食べたり、休憩のときにアイスクリームなどを一緒に戴くのを楽しみにしていました。

「宮川さんねー」から始まるお話は、いつも、ユーモアと思いやりに満ち溢れたものでした。

先生がお亡くなりになったと聞いて、私は喪失感で胸がいっぱいになりました。あの、くるんくるんのおめめと、“にこ〜っ”という笑顔、そして、「宮川さんねー」というお声が忘れられません…。

お酒がお好きだった井上先生、きっと天国でもたくさん召し上がっていらっしゃることでしょ。私が伺ってご一緒させていただくまで、お元気で待っていらしてくださいね！

大物教授

藤倉 良（人間環境学部教授）

私が法政大学に着任したのは2003年4月。井上先生が退職されたのが2013年3月だから、ちょうど10年のお付き合いになる。

第一印象は、いつも資料室にいるオジさん。

「いよっ！」

私が24階の資料室に顔を出すと、井上先生が奥の事務机から声をかけてくれる。教員は自分の研究室にこもるのが普通だが、いつも資料室でお茶を飲んで、事務員さんと雑談している呑気なオジさんだった。

人間環境学部は第二教養部の改組によって1999年に設置された。大学の改組には私も関わったことがあるので多少は知っているが、面倒な仕事だ。文科省（当時は文部省）の認可をとらなければいけないので、大量の書類を提出しなければいけない。書いて出せば良いというわけではない。改組すれば授業科目も変わるから、文句を言ってくる教員もいる。そういう人を説得して、関係者の合意をきちんと得なければいけない。なんとか書類を出しても、今度は文科省の担当官が注文をつけてくる。持ち帰って書き直し。そんな作業が続く。

井上先生は改組時に第二教養部長として陣頭指揮を執り、人間環境学部を設置に導いた最大の功労者だったと聞いている。大物教授だったわけだ。私が最初にお目にかかったのは、学部設置から4年が経過し、運営も軌道に乗ってきた時期だった。もういいだろうということで、のんびりしていたのかもしれない。

大物教授の片鱗が見える時もある。教授会だ。人間環境学部の教授会では、意見が対立して激論になることはまずない。皆無と言って良いだろう。それでも、意見がしっかりまとまらずに、会議室の中がモヤモヤすることもある。そのような時だ。

「それで、いいんでないかい？」

井上先生がポツリと言うことで、収まってしまう場面を何度か見た。やっぱり

大物だった。

井上先生は授業やフィールドスタディでは水質分析を教えていたようだ。私の授業に富栄養化を良く理解している学生が時々いたので聞いてみると、井上先生の授業で教わったと言う。

「ウチの学生は温度計の扱い方も知らねえ。バケツの壁にぶつけて壊すヤツがいる。そいつらには、1本幾らするか言ってやるんだ」

理系出身の私のことは同業者だと思っていたようで、そのような愚痴を私にこぼす。退職のときには、未使用の水質簡易測定用のバックテストを幾つか頂いた。ゼミ学生に水質分析を教えるのに使わせてもらった。

理系の研究者は大部屋の実験室で仕事していることが多い。井上先生がいつも資料室にいたのも、昔からの習慣だったのかもしれない。

古き良き時代の偉大教授。こんな先生はもう現れないかもしれない。

井上先生の思い出

— たった1年、長くて濃い1年 —

高田 雅之（人間環境学部教授）

井上先生との出会いはお酒のお誘いでした。法政に来て間もない私の部屋をノックし、ドアを開けて姿と同時に飛び込んできた「今晚一杯いかんかい」との一言に、即答で「ぜひ」と私も喜んで答えました。これが井上先生と交わした最初の言葉です。以後、毎月欠かさず関口先生と3人でメケ谷の「酒当番」へ通いました。時には学部の先生達とともに、他学部の先生や学生も交えて、すっかり店の常連となり毎月楽しい時間を過ごさせてもらいました。

井上先生は決まって焼酎に梅干しを沈め、煙草の煙に身を包んで（そんな時はプラターズで有名な「煙が目にしみる」や五輪真弓の「煙草のけむり」の曲が頭に流れます）、秋田の森吉山やクマとの出会い、海外研修で行かれた北欧の話などなど、フィールドのことを実に気持ちよく語って盛り上がっていました。そして「イノ」「せきぐっさん」（ちなみに私はクマちゃんと呼ばれていました）という関口先生との掛け合いが頂点に達するころにお開きとなります。法政に来たばかりの私は、そこで交わされる会話はとてもありがたいものばかりでしたが、如何せん井上先生という時はいつも酔っているので、大半の記憶はお酒に溶けてしまい心地よい余韻だけが残るといふ何とも幸せな時間でした。

思えば私が来たのが2012年4月、井上先生が退職されたのが2013年3月と、わずか1年間でしたが、5年間くらい毎度飲み連れて行っていたいただいた錯覚を抱かせます。退職後も大学に来られた時はいつもの店に梅干しを沈めに行きましたし、2016年の冬には井上先生のご自宅近くまで押しかけて、卒業生のOさんと3人で、先生行きつけの昭和人にじっくりくる渋い居酒屋でかけがえのない時間をいただきました。あの時誘ってくれて本当によかったと心から思っています。

井上先生の気配は、先生から使つてと言われた13階の研究室に今も残っています。引っ越し当初は煙草の臭いが染みついていたのですが、今は学生が行っている食品廃棄物によるコンポストや、魚の水槽の水を循環させて野菜を作る実験な

ど、いろんな臭いが混ざっています（笑）。先生が使っていた実験器具を手にするたびに、決まって酔って愉快地にフィールドを語る場面が浮かんできます。そして今にもドアをノックする音が…「高さんちょっと一杯いかんかい」。

井上先生との17年

長峰 登記夫（人間環境学部名誉教授）

私が法政大学（第二教養部）に着任したのは1996年のことであった。その年、井上先生は在外研究でスウェーデンに滞在しておられたので、同僚としてのおつき合いは1997年からである。私にとって法政2年目の1997年、第二教養部長に就任された井上先生に命じられて教授会副主任となり、井上部長、関口和男主任の下で1年を過ごすことになった。

お二人ともエネルギーに仕事をこなす人たちなので、いまでは信じられないことだが、ほとんど役に立たない私は、執行部会議には必要なとき以外は出なくてもいい、学生問題の方をやってくれと言われていた。当時はまだ学生問題が多く、その対応にはかなりのエネルギーを要したからである。

当時は、人間環境学部設置準備委員を割り当てられたりして、たしか夏休み返上で、毎週会議に出ていた。そのころ担当している委員会は作業部会を含めたしか12あり、教授会で苦情めいたことを言ったようにも記憶している。設置準備委員については、海外に10年ほどいて帰国したばかりの私は、日本の大学のことなどまったく何も知らない。なんと無責任な大学だと思ったものである。

ところで、井上先生が退職されるまでの数年あまり、夏のフィールドスタディでご一緒した。会計と点呼を担当したくらいで私はほとんど役立たずであったが、このとき井上先生の教師としての資質を見た気がした。20名前後の学生を引率していると、必ずと言ってよいほど、グループに溶け込めない学生が1人くらいはいるものである。その日一日の反省（勉強）会のあとコンパになると、学生たちをあれこれからかったり、冷やかしたり、笑わせたりしながらも、いつの間にかそういう学生も中に溶け込んで、照れながらも楽しそうにやっている。そういう姿を見るにつけ、これは意識してできるものではないと感服したものである。教員としてのそういう資質に出会ったのは、私の教員人生の中では、後にも先にも井上先生1人だけである。

いつか、在外研究先のスウェーデンから友人が訪ねてきたことがあった。失礼

ながら、あまり英語が得意でない先生は永野先生を通訳に、近くの喫茶店でしばらく談笑したと聞いた。片言の英語でも（と言っては失礼だが）、その人の人間性が伝わるようなコミュニケーションができる。これまた並外れた天性の能力である。グローバル化の中でほんとうに必要な資質とは、おそらくこういう人のことだと思う。

17年のおつきあいの中で実に学ぶことの多い先生だった。退職されてからも時々携帯に電話すると、おう、いま畑にいるぞ。自然はいいね、と言って笑っておられた。在職中も、青森の百姓の倅である私にいつも、長峰君、いつまでこんな所にいるの、オレだったらさっさと青森に帰って百姓やるんだけどな。そう言っていた。そうはなっていないが、退職したいま、私は高齢者の家の庭を草刈機で掃除するボランティアをしている。おう、やっと少しはやる気になったか。先生がご存命だったら、そう言って、少しは褒めてもらえたかもしれない。

井上ゼミの思い出

小林 信彦（法政大学文学部地理学科卒、法政大学兼任講師）

文学部地理学科井上ゼミは1991年の4月、退職された三井先生を引き継ぐ形で始まりました。当時、私は4年生で、同期生は7名、3年生は10名、あわせて17名だったかと思います。4年生は他のゼミを主としていたもの以外は全員井上先生にお世話になることになりました。

当時井上先生の研究室は地理学研究室の並びにあり、以前にもお目にかかったことはありましたが、きちんとお話しさせて頂いたのはゼミがはじまってからでした。

地理学科では講義を担当されていない状況からのゼミ開始でしたので、どのような先生なのかよくわからず、ゼミの開始前には不安を感じることもありました。井上先生もある程度方向性が固まりつつある状況からの指導でしたので、やりにくく感じることもあったのではないかと思います。

ですが、少なくとも当時のゼミ生としてはその心配は杞憂でした。4年生でしたので卒業論文の準備等ありましたが、個別にテーマや関心・興味の方向をよく聞いていただき、また細やかな指導・アドバイスを頂きました。

ゼミの時間以外にも学生と積極的に関わって頂きました。ゼミ合宿や打ち上げの飲み会も参加率が高かったです。今はもうできませんが、前期のゼミ最終日には缶ビール等購入してきて屋上で飲んだこともありました。

ゼミ合宿は秋田県森吉山でした。秋田県角館からローカル線で1時間半、さらにマイクロバスで30分ほどと秘境感あふれる温泉宿で合宿を行いました。周辺の溪流やダム湖の調査、営林署の方に案内をしていただきながらの森吉山登山と盛りだくさんでした。森吉山登山は普段運動不足な身には少しきつく感じましたが、頂上付近の眺めも良く、非常に楽しい思い出です。宿に戻ると宿自慢の露天風呂や宿のご主人が釣った天然物のアユ・イワナとごちそうで疲れもふきとびました。

井上先生は釣りをご趣味とされていたので、釣り好きの同期生などは教室

での授業以外にも釣りも教わっていました。ゼミの時の井上先生よりも大分厳しかったのが印象的で、普段は学生に気を遣って接して頂いていたのだと今になって思います。同期の仲間とまた井上先生と秋田に行きたいねと度々話していましたが、かなえられなかったことが残念です。

井上先生、井上ゼミでは楽しいことばかりでした。お世話になりました。本当にありがとうございました。

井上奉生先生にご指導いただいたこと

片平 敦（人間環境学部卒業生）

私は1999年4月に法政大学人間環境学部に入學した、同学部の1期生です。井上先生のゼミに所属してゼミ長を務めさせていただき、大変多くのことを学ばせていただきました。

ゼミや講義の場だけではなく、所属していた「キャンパス・エコロジー・フォーラム」の外濠水質調査や、秋田県・森吉でのフィールドスタディ、そして、市ヶ谷キャンパス近所の居酒屋での楽しい宴会など…。私の大学生活の思い出の中にはいつも、井上先生の優しくて豪快な笑顔が残っています。皆でお祝いした先生の還暦の会もとても懐かしい思い出です。

特に、森吉でのフィールドスタディは、私にとっては本当に刺激的で、貴重な体験でした。

標高とともに変わっていく森吉山の植生。強風により傾いて生えている変形樹。先生から教えていただいた「オオシラビソ」の樹木名はあれから20年経ってもしっかりと覚えています。森吉ダムでボートに乗り、湖面からの鉛直方向の水温変化を測定した時、途中で水温が急激に変わる「躍層（変温層）」を目の当たりにして感激したことは今も忘れられません。そして、先生と一緒に川に入って体験したアユの刺し網漁。宿泊先の杣温泉旅館で、皆で食べた塩焼きの味は格別でした。

森吉では、「自らの足で現地を歩き、五感をめいっぱい使って学ぶ」ことの大切さを強烈に実感した経験をさせていただきました。私は現在、気象解説者として関西のテレビ局で日々の気象解説に臨んでいます。普段から各地の気象観測所「アメダス」を実際に訪ねたり、災害時には被災地に足を運んで現地調査を行ったりしています。私のこの姿勢は、井上先生から教わり、井上先生のお姿に憧れたからこそ、身につけているのだと思います。

大学の卒業旅行では、私は井上先生やゼミの同期生とともに冬の杣温泉旅館を訪ねました。雪の壁に囲まれた露天風呂で日本酒の熱燗を飲みながら歌った校歌

は、今まで何度も歌った中で最高の思い出になっています。今振り返ると、まさにあの場面こそが「よき師よき友つどひ結べり」だったのだと感じます。

先生はお亡くなりになった後、東京湾から海洋散骨にて旅立たれたと伺っています。ご承知の通り、海の水は蒸発して水蒸気となり、上空で雲となり、その後は雨や雪となってやがて地上に降り注ぎます。雨水は集まって川となり、土に染みこんで地下水となり、巡り巡っていずれまた海に出て、この地球上をいつまでも循環し続けるのです。先生はこれからも先生らしく、水になって世界中を巡るんだ、と感じました。

毎日、空に浮かぶ雲を見上げ、降る雨を見つめる私の仕事は、地球を巡り続ける井上先生をいつも思うことのできる大変幸せな仕事です。私の仕事も「水商売」。先生の教えを胸に、これからも人のお役に立てるよう精いっぱい仕事に取り組んでいくことが、私ができる先生への恩返しと思っています。

井上先生、本当にありがとうございました。

(かたひら・あつし／法政大学人間環境学部1期生・気象予報士)

井上先生の物語

越智 裕一（人間環境学部卒業生）

私は法政大学人間環境学部を2012年に卒業した。在学中は故関口和男先生のゼミに出入りしていたため、関口先生のゼミ終わりに必ず開催される飲み会に頻繁に参加していた。関口先生は井上先生と親密であり、性格や専門分野も全く異なるにも関わらず、毎回飲み会は大きく盛り上がっていた。そのため、私は学生時代から井上先生とも飲む機会が自然と増えていた。私が大学を卒業してからも、どこで電話番号を交換したのか忘れてたが、仕事終わり際を見計らったように井上先生から電話があり、

「おう、元気か、今日どうだい？」

「はい、いきます」

というやりとりが毎月あった。井上先生の地元、埼玉県指扇にある居酒屋で飲むのである。その居酒屋は刺身が新鮮で美味しく、季節の魚を食べさせてくれた。井上先生はマグロの赤身が好物で、粉山葵を溶いた醤油に浸けて、少し時間が経ったツケになったようなマグロを食べるのが好きだった。たまに、シマアジや生タコ、サンマなど旬の魚を頼み、魚の美味しい時期を教えてくれた。

井上先生はいつも刺身3点セットを頼む。それを肴に、夏はホッピー、冬は熱燗を「ちびり…ちびり…」と飲んだ。量は飲まず、いつも2合～3合で終えていた。

「俺は、シミったれ、だからね。」

井上先生の酒席での口癖である。私もお酒のお相伴をするのだが、食欲旺盛なので、刺身3点だけでは物足らず、遠慮なく刺身を追加し、その上ナマズの天ぷら、なめろう、握り寿司と頼み、「美味しいですねえ」と少々食べて飲んで、それを先生が微笑みながら見ているのが、いつものパターンであった。帰り際、井上先生は、

「ここの握り寿司は家内が好きだから」

と握り寿司を一折、たまに持って帰られていたのを覚えている。

こういった席を何度ご一緒したかわからないが、ご一緒している際に昔話をい

くつも聞かせていただいた。いくつか、紹介することとしたい。

井上先生は満州（中国東北地方）に生まれ、岩手で育つ。父親が厳しく、幼い頃に戦争で負けたことを口に出すと、殴られたというほどだった。岩手では動物を多く飼い、子供の頃から動物や自然に慣れ親しんでいた。戦後の食糧難の折りではあったが、川はでウナギやエビがよく捕れた。母親はエビを調理してくれたが、ウナギは気持ちが悪くて調理してくれず、仕方なく自分で捌いて調理するようになった。

東京に出るまでは、近隣の山によく出掛け、植物を観察して鳥の声を聞き、動物の足跡を辿りどういう動きをしているのか想像した。動物の足跡を辿ることで、ウサギが立ち止まって辺りを警戒したり、キツネがそれを追いかけたり、テンやイタチが争う様子がわかるので、森の様子を観察して動物の動きを想像するのが好きだった。また、山では、時にウサギを獲っていた。雪が積もるとウサギの足跡がはっきりとわかり、通る道が想定できるので、ウサギの通り道に罠を仕掛ければ、必ず獲れたという。

法政大学入学後は地理や水質について学ぶ。西武新宿線沿いのアパートの一室を2人で借り4畳一間で過ごしていた。学業に励む傍ら、生活費と学費を稼ぐために秋葉原駅で貨物の積み下ろしのアルバイトをしていた。人力で貨物から荷を下ろすので、筋肉がついたという。積み下ろしのアルバイトでは、マネージャーまでやっていた。また、浮間舟渡駅の近くにあった太陽製菓という製菓工場でビスケットの製造ラインのアルバイトもやっており、こちらはビスケットのパックにホチキスを留めるだけなので楽だったそうだ。学業とアルバイトで忙しい最中、浅草にある葵丸進（2022年現在も営業中）という天麩羅屋で、天ぷら定食をたまに食べることが一番の贅沢だと語っていた。

大学卒業後は、資源科学研究所（1971年に国立科学博物館に吸収合併）に勤務して全国各地の環境調査に携わった。秋田県の森吉山に調査にいったから、秋

田が好きになったそうだ。(なお、井上先生が資源科学研究所に勤めていた際に携わった、秋田県森吉山ダムの環境アセスメント報告書が現在も残っている。) その際、営林署や役所の方と、調査のついでに良く飲んでいた。秋田では訛りも入って「イノウエ シェンシェ」と呼ばれ親しまれていた。交通事故で死んだカモシカを食べて美味しかった話(カモシカはウシ科なので肉は美味だが、狩猟は禁じられている)や、ウサギを獲ってウサギ鍋にしたという話をよくしてくれた。ウサギ鍋は、肉よりも出汁が染みた大根が美味しいという。

秋田県での定宿にしていたのが、森吉ダムから流れ出る小又川沿いにある、「杣温泉」である。まさに秘境の宿であるが2022年現在も営業しており、主人の杣さんとよく飲んで釣りをしていた。(偶然にも、森吉ダム及び小又川沿いにある水力発電所は私の勤務先が管理しており、縁を感じている。)

井上先生が泊まっていたある時に、杣温泉の駐車場に熊が出たということで、温泉の主人の杣さんが猟銃2丁を手に井上先生の部屋に飛び込んできた。そして、

「イノさん、出番だ、はい」

と猟銃を1丁渡して、外に飛び出して行ったそうだ。井上先生も狩猟をやっていたため、仕留めようとばかりに外に出たが、杣さんから弾を渡して貰っていないことに気づき、冷や汗をかいたという。その熊は、宿泊客をはじめ大勢の人間が騒ぐために、驚いて山に逃げていったという。(現在、人から銃砲や実包を借りる行為は銃刀法違反となる。)

ある日、狩猟で熊を撃ち殺した際に、熊の子供が出てきたそうだ。井上先生は子供だけ残すのは残酷だからと子熊も殺そうとしたが、懐いてきたために、遂に殺すことができず、連れて帰ることにした。檻を作り、その子熊にハナコと名付け何年か飼育したそうだ。段々と子熊も大きくなり、お尻に噛みつかれてから、流石に手に余ると感じて手放したという。その後はわからない。

ある期間、スウェーデンのウプサラ大学に赴任されていたことがある。現地では、エバラ黄金のタレで牛肉と玉ねぎの炒め物を作って振る舞って大歓迎された

り、吹雪のなか広い大学校内で遭難しそうになった、といった話を色々されていた。ウプサラ大学では講義も担当していたが、ある日、あまりにも学生がうるさく英語で講義するのが嫌になったので、途中から日本語で講義をし始めたら、学生が急に静かになり、聴き入り、しかも頷いていたという。

「日本語がわかっていたのかねえ、笑っちゃうよ。」

スウェーデンでの余暇は、釣りや散策を楽しんでいたという。スウェーデン北部のミーサ人が住む地区にも行き、村外れの雪原に夜星をみにいった。北極圏に近い場所なので星空がそれはもう大変に綺麗で日本のどこで見る星空とも比べ物にならないものだったそうだ。あるとき、少し離れた場所に車で送って貰い、後で迎えにくる約束をして星を見に行ったという。しかし約束の時間から数時間経っても迎えが来ず、一人雪原に取り残され、寝っ転がって「もうダメか」と思ったが、間一髪で迎えがきて命拾いをしたという。道を間違えて遅くなったとのことで、しきりに謝られたそうだ。

日本に帰国する際、スウェーデンの空港でチェックイン手続きをしようとしたら、スタッフから、

「日本にお帰りですか」

と聞かれ、すんなり理解できたので、

「(スウェーデンにいた間に、スウェーデン語が理解出来るようになったんだなあ)」

としみじみ感心してスタッフを見たら、何のことはない、スタッフが日本人で日本語を話していたのをスウェーデン語で話しかけられたと勘違いしていただけで落胆したという。

教職を辞してからは、地元の埼玉県指扇で畑を借りて、野菜を作っていた。土壌と水の性質を良く調べて生育に適した状態に調整していたので、野菜が採れて仕方がなかったそうだ。周りの人にも配っていたが、農家の人からコツを聞かれて説明しても、相手が理解できないので、

「不思議だねえ、まあ、いいじゃないの」と答えていた。

畑仕事は面白く、

「昔は獲物を追うのが好きで狩猟民族だと思っていたが、やっぱり俺も日本人、実は農耕民族だったんだな」とよく言っていた。

井上先生と私がいつもの居酒屋で飲んでいると、不意に、「射撃に興味はないかい？」と聞かれた。興味があります、と答えると

「俺はもうそろそろ射撃を辞めようと思っているんだけど、どうだい、やらないか。」

と誘われた。当時は、まさか自分が射撃をやるとは思っていなかったが、折角の機会だからとお願いして、井上先生の愛銃を譲っていただいた。譲っていただいてから7年経つが、未だに現役でクレー射撃と狩猟に利用している。共に、井上先生の昔からのお仲間も紹介してもらい、今でもお付き合いさせていただいている。

晩年、先生は腕や手の自由が利かなくなり、体力も衰えたということで自ら畑仕事も辞めた。本を読み、絵を描いていた。「シートン動物記」を読み返して、動物の面白さを良く話していた。動物の動きや観察について話すときは、それはもう楽しそうに話していた。

コロナが流行り始めて飲み会を辞める前、井上先生はしきりに秋田のことを話していた。先生に「秋田に行きましょう、杣温泉と一緒に泊まりましょうよ」と言っても、

「行きたいねえ、でもまあ、もういいかなあ」と残念そうな、諦めたような、そんなやりとりを何度かした。

ほんのごく僅かな物語であるが、ここに、井上先生の物語として寄せる。

東京湾の水質と 生徒達の心境の変貌について

石川（鈴木） 絢子（人間環境学部卒業生）

私は恩師である関口和男先生に大学を卒業後「ゼミや大学は卒業するところです」と言いました。

先生は「うん。そうだね。」「それでいいよ。」と返ってきて、それが私と先生との最後の会話になりました。

格好をつけていたつもりはありません。

でも私はというと恥ずかしいくらいに後悔をしていました。

世間知らずだったのです。

2021年9月 井上先生に手紙を書きました。

怯えるような気持ちで取り繕うようにペンを走らせました。

世間知らずだった私がとうとう子どもを産んだ、「先生、私も年貢の納め時です」

そう書きました。

返事は3ヶ月後、奥様からでした。

「読んで聞かせました。」と書いてありました。

色々な感情がわき上がりましたが、当時はとにかく『ああ地球から偉大な人が消失した』と心底思いました。

消失…

多分大学の授業で習ったと思うのですが、『エネルギー保存則』というものがあります。私は、人間環境学部が生み出したモンスター、「理系のことを全くわからないのに理系をかじったように見えるただの取り柄のない文系女」なのですが、たしか「世界からある物質が全く無くなるということはありません」という話だったかと思います。

井上奉生先生は多くの学生に強烈なインパクトと学びを与え続けました。

井上先生に救われた人もたくさんいるでしょう。私も広義にはその一人に入るかと思っています。

先生の与えた影響というのは、構内や飲み会でばっと消えるものではなく、私達の心の中に残り、そして日が経つにつれて大きく育つような、そんな生き物のようなモノでした。

人間関係で悩んだとき、仕事で行き詰まったとき、とんでもない失敗をしでかしたとき、心の中に住んでいる井上先生に「まあ、いいじゃないの。」と言ってもらって助けてもらった元生徒が何人いるでしょうか。

「もう会えないけど心の中にいる」

なんて陳腐で面白くない言葉と思いつつも、それ以外の表現が見つかりません。

井上先生の影響、エネルギーは各地で大勢の人に種として植えられ、どんどん勝手に育ちました。

たくさんの方が心の井上先生に語りかけ、エネルギーをもらってきました。

『エネルギー保存則』

先生は消えていません。色々なところにエネルギーを分散させただけ。そう

思っています。

すべては海から産まれた、先生は授業でそうおっしゃってました。

そろそろ東京湾に、自分の子どもを見せに行こうと思っています。

井上先生とゼミ長

松尾 啓子（人間環境学部卒業生）

私が井上Bゼミに加入したとき、ゼミ生は3年生4人、2年生3人、2年生私1人の超少人数ゼミだった。正直にいうと最初は先生と上級生しかいない場に緊張してゼミに行くのが少し億劫だったのが今となっては懐かしい。

しかしゼミを切り上げての酒当番、神楽坂飯店、ゼミ合宿などを通し、ゼミが徐々に楽しい場になっていった。ラーメン屋に行きたいため小麦の議題を出してみたりして先生は苦笑いをしていたが、いつも「お腹空いてるか？」と聞き、「はい！」と答える生徒を連れて学生の腹をパンパンにするためお店に繰り出すのだ。

3年生になり常山さん、高橋さんが入ってくれ、ゼミがより楽しいものになった。2年生から在籍していたのが私一人のため問答無用でゼミ長になった。ちなみに先生はゼミ長からの電話にしか基本でないし、かけても来ない。当時先生との電話はゼミ長の特権だったのだ。ゼミ長になったことで先生との交友はより一層深まったので、ゼミ長になって本当によかったと思っている。

Bゼミは7限のため、飲み会をするときはいつもゼミ生だけだったが、ある日ゼミ終わりに先生が「これから関口ゼミと飲むけど来るか？」と声をかけてくれた。

それから関口ゼミのメンバーと交友ができ、関口ゼミの飲み会にも誘ってもらえるようになった。みんな個性的で自律しており、それまで流されるように生きてきただけの私には刺激的で、とても愉快的な空間だった。

あっという間に2013年大学卒業の年、先生も同時に法政大学を退任された。

これで先生との交友も終わってしまうのかと思ったが、ありがたいことに付き合いは続き、学生を連れて行くことはほとんどないと言っていた「たまりや」に呼んでくれ、社会への不平不満を垂れ流す私たちの話を呆れながらも聞いてくれ、お決まりの「いいじゃないの～」で収めたり、いつも写真を忍ばせているお

孫さん達の話をしてくれたり、獵友会の皆さんとの釣りに誘ってくれたり、卒業後の方がお互い立場もなく気楽な話ができたとような気がしている。

コロナ禍で人と会うこともままならなかった空白の時期が終わりを見せ、今でも先生に会えないことを認められない私は、いい加減痺れを切らした先生から「忙しいか？そろそろどうだ？」という電話が来るのではないかとずっと待っている。

なにせよ身体が丈夫なため次に先生と飲めるのは50年後とか先になってしまふかもしれないが、また一緒に飲んだときに、それまでの愉快的出来事をツマミ話として引っ提げていけるよう、楽しい日々を過ごして行きたい。

井上先生と飲み会の思い出

元村 麻美（人間環境学部卒業生）

井上先生とお会いするのはいつも、関口ゼミの飲み会でした。お酒で頬を赤らめ、ニコッと笑いながら「いいじゃないの」と仰っていた姿は今でも忘れられず、先生のその言葉を聞くと本当に「まあどうにかなるか！」という気持ちになったものです。

関口先生は井上先生のことを「いのさん」と呼び、お二人は専門分野も性格も違うものの、お互いを認め尊重しており、根底にあるものが似ているように感じました。

当時の私は「大人の友情」とも言えるお二人の関係を見て、歳を重ねるのも悪くないかな、と感じたのを覚えています。

在学中には井上先生の講義をいくつか取っていましたが、講義以外（…つまり飲み会）でお会いする回数の方が遥かに多かったため、失礼ながら「教授」よりも「飲み仲間」と言った方がしっくりくるように感じていました。

私が大学を卒業し、井上先生がご退職されてからも「飲み仲間」としての関わりは続きました。同じ埼玉に住んでいるという好で、先生のご自宅近くの居酒屋へ時折り誘ってもらいました。正確には井上先生から直接連絡があるわけではなく、同じく埼玉に住んでいたOさんから声をかけてもらっていましたが、社会人になってからも井上先生と共にお酒を飲めたことは少し意外で、同時にとても嬉しく思っていました。

「埼玉で一番海に近い」居酒屋でお刺身を食べお酒を飲みながら、近所の畑で野菜を育てていることなどお話ししているのを見てると、聞いているこちらまで楽しくなってきました。

そのうちにコロナ禍でお会いできなくなってしまい、そして遠いところへ逝ってしまわれたこと、大変残念であります。

私事ではありますが、井上先生の闘病、ご逝去の時期が父のそれと近く、どうしても状況を重ねて考えてしまいます。井上先生自身もご家族も大変お辛かったですでしょう。

あちらの世界では関口先生やお知り合いの方々とお酒を呑み交わし、井上先生の広く大きな心で、どうかご家族や教え子たちを見守っていてください。

また会う日まで。

大学時代の思い出

山本 菜摘（人間環境学部卒業生）

私は2013年卒業、法政大学人間環境学部のOBである。私の大学時代はとても幸せであり、それはひとえに井上先生や関口先生を初めとする素晴らしい先生方、ゼミの仲間と出会えたからであった。

井上先生と初めて出会ったのは記憶に定かではないが、初めてお話し出来たのは関口ゼミの飲み会であったと思う。私は関口先生のゼミに所属しており、飲み会のために6時限目に時間設定された（らしい）ゼミ終わりそのままに、毎週のように皆で酒当番という飲み屋に行っていたのであった。その飲み会には毎回井上先生もいらっしゃって、本当に楽しそうに関口先生やゼミ生たちとお喋りし、お酒を酌み交わしていた。私は全くアルコールを受け付けない人間だったが、その時間が楽しみで仕方なかったのである。話題は真面目なお話から興味深い話し、ほっぺが筋肉痛になるまで笑えるものや、本当にどうでも良い話まで色々であったが、私が特に好きだったのは井上先生のする動物の話や美味しい料理の作り方、北欧の子供たちや自然の話。ウサギの捕り方から熊のお世話の話まで、とにかく活きいきと色々な話をしてくださったことを覚えている。

また、忘れられないのは関口ゼミのゼミ合宿の時のことだ。当然井上先生も同行してくださって皆で福島県に合宿していたのだが、その帰り道バスで高速道路走行中に3.11東日本大震災が起こった。

道路は割れているところもあり、一瞬パニックのようになっていた学生もいる中、井上先生と関口先生は大丈夫、なるようになるからとお酒を酌み交わしながら和やかな空気のなか皆んなで大学まで無事に帰り着いたのだった。バス会社の方々が素晴らしく、快適無事に送り届けてくださったのも大きかったが、先生方は学生が無事に家に帰れるようにさりげなく必要な情報を集めながら最後まで見届けてくださったのだった。井上先生と一緒に大丈夫というあの不思議な安心感は、一生私の中に残っていると思う。

いつもの飲み会で楽しそうな先生の笑顔が大好きでした。魚釣りやたまりや、沢山の時間をご一緒できて大変幸運だったと思います。本当にありがとうございました。

水が巡るように

吉岡 耀子（人間環境学部卒業生）

2022年4月、井上先生は東京湾の海に帰られたとお聞きしました。今頃は海から空へ、空からまた雨となり陸を流れ、海、そして再び空へと、大きな旅をゆうゆう楽しんでおられるような気がします。

社会人学生として人間環境学部に入學した頃、井上先生から「陸水」という分野のことをお聞きしました。当時の私には耳慣れない言葉でしたが、講義に通ううちに水の循環や自然現象が生き生きと姿を現した気がします。図と文字がぎっしり詰め込まれた講義資料を老眼鏡片手に眼を通しては充足感を味わい、先生の体験話に若い学生さんたちとともに声をあげて笑いながら聞いていました。

4年生の夏休みに行われたフィールドスタディは下記の2部構成で、

A、富士・伊豆の自然と陸水環境

B、酸性河川の水質改善と浅間火山活動の歴史

ここに参加して大きなスケールを体感しました。

とくにAプログラムの、富士山を取り巻く陸水の諸現象を学んだ数日は忘れられません。…精進湖では雨の中での水深・水質調査、白糸の滝での水採取、その澄んだ湧水で栽培するワサビ畑の案内と、いつも、どこでも、先生は足取り軽く目的地に進み、学生たちはワクワクしながら従ったものです。学生さんたちが期待で顔を輝かせて見入っていた姿は今も記憶に残っています。この時に富士山という山塊が巨大な水瓶でもあることに大きな刺激を受け、私はその後大学院の「水文学」へと進みました。

後半Bプログラムも驚きの研修でした。草津では石灰石を溶かした白い流れが酸性河川を中和し、浅間山では1783年大噴火で残された「祖母と孫娘が避難途中で倒れた石段」とその上の社に集っていた村の人々に強い印象を受けました。長野県のキャベツ畑の栽培技術も新鮮で、いただいた大きなキャベツは新鮮でおおらかな野外講義の象徴のようでした。

先生は2013年の最終ご講義で「私が水商売に入ったわけ」と題して、ユーモラスに内容豊かにお話されました。大教室の学生さんたちの笑顔も素敵でした。

井上先生、ありがとうございました。

(2012年卒業 ゼミ生)



フィールドスタディ・精進湖の水質調査



白糸の滝で水採取



還暦祝い 2002年10月



FSにて



最終講義 2013年

井上奉生 最終講義

わたしはなぜ 水商売に入ったのか？

—私と陸水学—



2013年1月12日(土)15:20~

法政大学 外濠校舎S205教室

懇親会 17:30~19:30 富士見坂校舎地下1階 カフェテリア

人間環境学部教授

いのうえ ともお

(会費 2,000円)

井上奉生



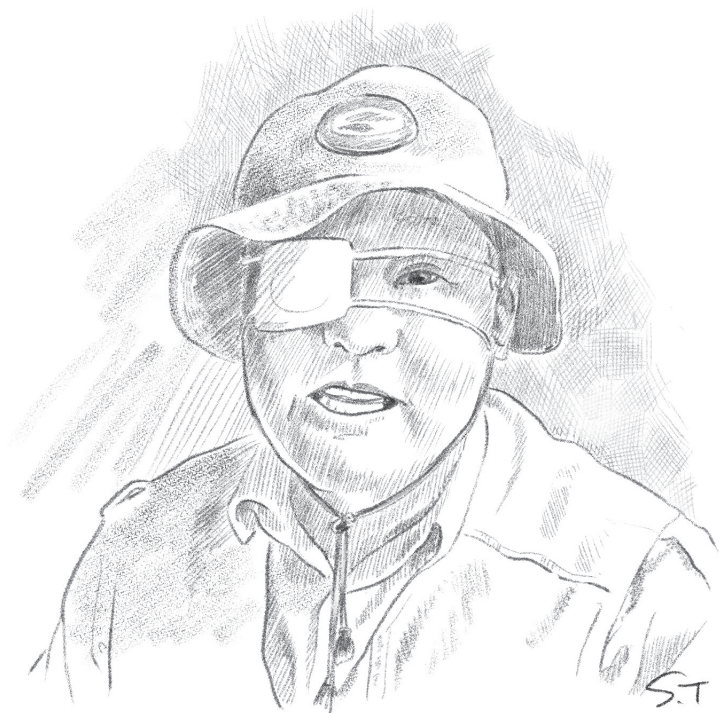
1942年満州国出生。1966年、法政大学文学部地理学科卒業。
(財)資源科学研究所(現国立科学博物館と合併)助手として勤務しながら、1969年、法政大学人文科学研究科地理学専攻博士課程修了。

87年法政大学第二教養学部助教授(地理学、古典講読)、95年スウェーデン国立農業大学環境分析研究所留学を経て、99年の人間環境学部設立当初から法政大学人間環境学部教授を務める。主たる専攻分野は陸水学。

最終講義ポスター：作一高島佐代子



作—高島佐代子



作一高島佐代子